
～ 傭兵達の挽歌 ～ PSPo2i外伝

砂布巾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傭兵達の挽歌 ～ P S P o 2 i 外伝

【Nコード】

N 1 4 5 8 Y

【作者名】

砂布巾

【あらすじ】

グラール太陽系。

SEED事変という世界滅亡の危機は乗り越えたものの、その傷跡は深く、原生生物の凶暴化、さらには資源枯渇と新たな問題が浮上しているこの世界。

ヒューマン、ビースト、ニューマン、キャスト、そしてデューマン。

いずれの種族であろうと、この世界に生を受けたからには選ばねばならない。

生きる為の戦い。自分が自分を誇る為の闘争の方法を。

これは3つの惑星に生きる数人の傭兵達の生き様を表した物語。

この小説はファンタシースターユニバース（PSU）及びファンタシースターポータブル（PSP）シリーズの世界設定を元にした二次創作小説です。

〈序章〉 討伐任務（前書き）

はじめまして、砂布巾と申します。

こちらはPSP用ソフト、『ファンタシースターポータブル2インフィニティ』の世界設定をもとに、筆者の気まぐれでまったり進めようと始めた二次創作小説になります。

何分小説など書くのは初めてですし、誤字や日本語の誤用等、お見苦しい点はあるかと思いますが、進行を暖かく見守って頂ければ、筆者が嬉しさに涙します。

また世界設定はPSU・PSPo・PSPo2iの公式設定を遵守するつもりですが、ゲーム以外ではネットから得た知識を元にしていきますので、明確な間違い等発見された方、暖かくご指摘頂けたら筆者が感激でひれ伏します。

エミリアやイーサンといった公式キャラもいずれは登場予定ですが、基本は世界設定を利用したオリジナルによるオリジナルストーリーの為、そうしたものが苦手な方は申し訳ありませんがUターンをお願いします。

では、しばし筆者の駄文にお付き合い下さいませませ。

〈序章〉 討伐任務

惑星モトウブ。

荒涼とした夜の西ググ砂漠をフローダーバイクで疾走する。

バイクのライトに照らされる風景は、彩りなど一切ない殺伐とした砂の世界。

資源枯渇問題が一番深刻に影響しているのは、自然が乏しいこの惑星じゃないだろうか。

『目標補足。デイマゴラス種。5時の方向・距離700。こちらに気づいた様子ですね。高速飛行しながら直線的に向かってきます。』

バイクを運転しながら、らしくない物思いにふけていた俺の耳に、後部座席からターゲットを目視した相棒の冷静な状況説明の声が入る。

『接敵まで20秒。大きさ・外皮の硬質化具合から、情報通り戦闘力Aランク相当と予測されます。これなら問題は無さそうですね。』

淡々と説明する声には余裕さえ感じられた。
頼もしい相棒の様子に自然と頬が緩む。

『ここら辺からやつこさんの縄張りって訳か。ソアラの情報はさすがに正確だな。高い情報料ふんだくるだけのことはある。……よつと！』

今回の依頼を振ってきた馴染みの情報屋に賛辞をつぶやいた後、標的を挑発するべくフロージャーバイクを蛇行させる。

『わっ！！』

突然の蛇行運転にバランスを崩したのか、後ろに乗った相棒が俺の背に手をつきながら声をあげた。

運転の為に前を向いたままの俺には見えないが、きつとキャストでありながら人工皮膚で感情豊かに動くその端正な表情は、俺への不満丸出しになっていることだろう。

『マースの運転は荒すぎです！戦闘と関係無しに事故死なんかしたら、間抜けな傭兵として歴史に名を残しますよ？』

『ハハッ、イカすなそれ。』

相棒の文句に軽口を返し、バイクのスピードを緩める。

後方の闇から、縄張りを荒らした侵入者を駆逐しようと巨大原生生物、デイマゴラスがあげる怒りの雄叫びが聞こえてくる。

『ポイント到達！打ち合わせ通りにいくぞ』

事前に戦闘場所と定めていた岩場のない開けた砂漠の一角まで来ると、相棒に戦闘開始を叫び、バイクを停止させて身一つで左方向に飛ぶ。

『バイクもタダじゃないんですがね…っと！！』

同時に相棒も散開するように俺とは逆の右方向へ飛び退く。

直後、後方から飛来した成人の体の大きさを軽く超える巨大な岩が、俺達の乗っていたフロードーバイクを直撃した。

『うはっ、狙い通りとは言え、派手にやってくれるわ』

デイマゴラスが投げた岩により、バイクは大破・爆発を起こし、炎上。

夜の砂漠に紅蓮の炎が柱のように立ち上がる。

爆風を避ける為のうつ伏せの状態から、標的を迎え討たんと跳ね起きると、赤い炎の光に照らされ目前の闇の中に醜悪な巨大原生生物の姿が浮かび上がった。

俺達と同じ二本の手足を持ちながら、ヒトの五倍を優に超える巨大な体躯、岩石のように硬質化した皮膚は怪物という形容にピッタリだ。

つり上がった黄色い双眸はこちらを外敵と見なし、炎の揺らめきを映しながら殺意に満ち溢れている。

いやいや、心臓の弱いヒトならあのツラ見ただけで色々漏れちゃいそうだわ。

『あーあ、バイクもつたいないですねえ。……この演出、本当に必要なんですか？』

呆れたように呟く相棒。

『ちゃんと自慢のその目の内蔵カメラで撮っておいてくれよヘンリー。次のクライアントへの売り込み資料にするんだから。』

炎上するバイクを尻目に笑いながら語りかけた俺へ苦笑しつつ、ヘンリーも愛用のナックル、ブレイン・スパイラルを取り出し装着した。

鮮やかな青を基調とした体の装甲と両腕に着けた黒い鋼拳。

顔だけ見れば一見温和な優男に見えるくせに、醸し出す雰囲気はこいつが数多の戦場をくぐり抜けた歴戦の勇士であることを証明している。

『本来は偵察任務用の機能であって、プロモーション映像の撮影の為ではないんですがね。』

そうばやきながらも、目前で敵意を剥き出しにしているデスマゴラスを見やり、相棒たる青いキャストが戦闘態勢を取る。

『自分の持つ能力は最大限有効に利用するべし。生きる上での鉄則だよ相棒。んじゃま、お仕事にかかりますか！』

ヘンリーに先んじて開戦の幕を切るべく、俺は手に持つ愛刀にフォトンを流し込み、再度こちらに投げる為の岩を探している標的に向かって駆け出す。

（悪いね、こつちも仕事なもんで。）

それが、この付近の集落の住民に甚大な被害を及ぼした巨大原生生

物への俺からの別れの挨拶だった。

「序章」 討伐任務（後書き）

物語の更新は一週間に一度を目標に頑張ってみようかなと。

世界観が好きな作品だけに、自分のミジンコ程もない文才では表現しきれない部分がめっちゃ多いとは思いますが、面白い話にできるよう自分なりに努力したい所存でやんす。

以降もお付き合い頂けたらこんな光栄な話はありません。

宜しくお願い致します。

登場人物紹介（前書き）

作中の登場人物について、オリジナルキャラクターを紹介させていただきます。

武器や服装の名称は、ゲームやってなかったら何のことやらさっぱりでしょうな。

文才なさすぎな自分に絶望っすわ

（＊、A、＊）

登場人物紹介

登場人物紹介

（オリジナルキャラクター）

マース・ウォーゼル

種族：ヒューマン

性別：男性

年齢：25歳

職種

ブレイバー

主な使用武器

ツインセイバー

愛用装備

剣影・リュウホウジドウ・オブシディアン

外見・特徴

本編の主人公の一人。赤髪、赤目、童顔。ゴコウバオリ着用。ニューデイズ生まれで服装などもかの地のものを好む。12才から傭兵として実戦を積んでおり、戦闘経験は豊富。生来器用なこともあり、ツインセイバーによる剣技、ツインハンドガンでの射撃、ロッドでのテクニクと戦闘に必要な技能は不得手なくこなす。

正義感が強く、弱者や子供には無条件に優しいが、それが目に見え

る形で出ることを好まず、悪びれることが多い。

しかし、相棒であるヘンリーなど周囲からは照れ隠しがバレバレな場合がほとんど。

日々を自由気ままに生きることが信条とする楽道家。

ヘンリー・ラウス

種族：キャスト

性別：男性

稼働期間：30年間

職種 ハンター

主な使用武器

ナックル

愛用装備

ブレイン・スパイラル

フローズンシューター

外見・特徴

ヘッドタイプは人間型。青い髪を後ろで束ね、金色の瞳が特徴的。接近戦に特化した格闘型のチューンナップを施しており、外装は身軽さを考慮し、ハウンスアーム・ロウバストルソ・ラピトウスレックを使用。

元々同盟軍に所属していたが、マースの父親と出会い傭兵に転職。尊敬する人間の息子ということもあり、マースが傭兵となった時から面倒を見続けている。キャスト特有の合理主義を持ちながら、ヒトの持つ情の大切さを認識しており、優しさと強さを併せもつ存在になりたいと強く思っている。

自由奔放なマースのフォローに忙しい苦勞人。

登場人物紹介（後書き）

今後も物語に絡むキャラクターは登場順に出していきたいと思います。

容姿とかを文で表現するってのは予想したより遥かにムズい

（x | x ;）

第一話　く傭兵稼業く

グラール太陽系

母なる太陽と3つの惑星から成り、複数の異なる種族が暮らすこの世界。全ての種族の大元となった「ヒューマン」

ヒューマンから万物の生成エネルギー、フォトンをより効果的に扱えるよう遺伝子改良され生まれた「ニューマン」

惑星モトウブなどの過酷な環境下に適応するべく、強固な肉体的進化を求められ生まれた「ビースト」

そして、ヒューマンによって作り出され、後に自らの手で種族として自立の道を選んだ機械生命体「キャスト」

俺はヒューマンのフリーの傭兵として、キャストの相棒と共に、依頼に呼ばれるまま各惑星を転々としている。

全世界を震撼させた、あの悪夢の様なSEED事変が無事終結した今も、グラールは決して平穏とはいえず、今回のように凶暴化した原生生物の討伐依頼は絶えることがない。

まあそんな物騒な世の中だからこそ、戦いを生業とする俺らのような連中も食いつぶれないだけの仕事にありつけるってわけだ。

『うーわ、油断した。卸したての一張羅が台無しだこんちくしょう。』

先程の戦闘でディマゴラスが繰り出した石つぶてを避け損ない、シルドラインの防御障壁を突破された結果、お気に入りの私服ゴコウバオリはボロボロの有り様になっている。

『格下の標的だからと侮った報いですよ。近接戦闘にこだわらず、戦術に遠距離戦も絡めていれば余裕で避けられたでしょうに。』

やれやれといった具合にヘンリーが説教を飛ばしてくる。

『討伐任務のPRには迫力あった映像の方がいいだろ？距離を置いて銃をぶっ放してるだけじゃ、アピール度が足らねーのよ。』

組織に属さないフリーの傭兵にとっては、いかに自分が有能であるかを周囲に示さなければ良い仕事は廻って来ない。

見る者を魅了するエンターテイメントは、娯楽に限らず、客を求める仕事にも不可欠だというのが俺の持論だ。

『必要のない苦戦を強いられた戦闘映像なんて、顧客にマイナスイメージしか与えませんよ。バカですかアナタは。』

ため息まじりにつぶやく相棒。

やれやれ、男のくせにロマンがわからん奴だ。

俺達の手によって倒され、砂漠に横たわるディマゴラスに近寄りつつ、万が一息が残っていないかチェックを行っていたヘンリーは、

いまだに衰えない炎を一瞥し言葉を続けた。

『まあ、これだけ派手に燃え上がっていれば、目印としては役立ちそうですね。ソアラさんも私達をみつけやすいでしょう。砂漠で野宿なんて真似は御免ですから、早いところ迎えが欲しいですね。』

討伐目標の生命反応が完全に停止したことを確認したのか、ヘンリーがそう言って頭上の夜空を見上げる。

つられて俺も上空に目を向けた。砂漠から見る満天の星空はなかなかロマンチックだが、側にいるのが野郎のキャストとバ力でかい原生生物の死体であつては長居したいとは思わない。

『同感だな。そろそろ時間のはずなんだが……お、来た来た。』

夜空に響く小型のフライヤーのエンジン音。

打ち合わせの時刻通りに現れた小型艇は今回の依頼の仲介者である情報屋の物だ。

明るい緑色の小型艇の側面には、でかでかとショッキングピンクのハートマークの塗装と、《愛の情報屋 ソアラ》という目に痛い宣伝文句が記されている。

うん、目立つのはいいが心からバ力だとしみじみ思う。

あんなふざけた趣味であつても、情報屋としての能力は文句なくピカイチときている。世の中不思議で一杯だ。

燃え上がるフローダーバイクに気づいたのか、小型艇は俺達の頭上

で旋回すると、速度を落とし近くに着陸する。

バカやろう、こんな近くで降りたら砂が舞い上がって俺達にかかりまくるだろうが。

仏頂面を隠すことなく立つたまま待ち続けると、着陸した小型艇からタラップが降り、小柄な女ビーストが飛び出てきた。

『はいはい、お疲れさまー♪ 予告時間通りに仕事終わらせてるなんて、さっすがだねお二人さん♪』

我らが《愛の情報屋さん》は、満面の笑顔を浮かべながらこちらに手を振り近づいてくる。

デイマゴラスの死体を確認し、仲介した依頼が無事完遂された様子を見て、上機嫌なのだろう。

所有している小型艇と同じ緑の髪は肩のあたりで切り揃えられ、好奇心が強い性格を表す大きな瞳が活発な印象を周りに与えている。

ソアラ・バーツ。小柄な体やまだ少女の域から出ない若さを侮る人間も多いが、一度でも彼女から仕事を廻された者ならばその情報の正解さ、プロ意識に信頼を寄せるはずだ。

今回も事前の打ち合わせ通り、正確な予定時刻に姿を現した。

クライアントへの報告の為か、デイマゴラスの死体を小型カメラで撮影した後、炎が消え始めたフロウダーバイクの残骸を興味深そうに見つめる。

『しっかし、ホントにフローダーぶっ壊したんだ？あはは、相変わらず派手好きだねえ。まあアタシもこーいのは嫌いじゃないけど。』

意外にも相棒よりロマンを理解する情報屋。

砂かけられたことぐらいは忘れてやっても良いかもしれない。

『あ、フローダーは借り物だから、アンタらへの報酬の中から弁償しとくね』

二秒で前言撤回だこんちくしょう。

『あ、その費用は私ではなく、マースの取り分からお願いしますよ？。』

容赦のかけらもない相棒からの追い討ち。どうやら俺のビジネス理論は二人には高尚すぎるようだ。

『バカやろう、撮った映像使えば絶対わんさか仕事来るんだぞ？必要な尊い犠牲ってやつだ。ヘンリー、後で映像データよこせよ？ソアラにも渡しとくから、馴染みの顧客に売り込みしといてくれ。』

『わ、割と本気だったんですねマース……ま、まあ戦闘データ収集の為に映像記録は撮りましたが。』

苦笑する相棒。

冗談だとも思ってたのか？仕方ない、天才とは常に孤独なものである。

『あはは、OKOK』任せときなさいって。ああ、ただ次の仕事ならわざわざ探す必要なんてないよ。』

『新しい依頼が来てるのか？』

聞き捨てならないセリフを耳にしソアラに視線を移すと、うら若き情報屋は両手を頭の裏で組み、鼻歌でも歌い出しかねない機嫌の良さで言葉を続けた。

『来てる来てる』それも結構大口の依頼だよ。いやあ、こんだけのビッグネームからお声がかかるとは、アタシも仲介役として鼻が高いよ。』

『イヤにもつたいぶるじゃねーか。どこのお偉いさんだ？』

普段からテンションは高めの女ではあるが、仕事からみでここまで上機嫌なのは珍しい。

よほど旨味のある顧客からの依頼なのだろう。

イタズラっぽく笑いながら俺とヘンリーの顔を交互に見やり、我慢できないといった様子で話を続ける。

『うふふ、聞いて驚きなさい。依頼人はVIPもVIP。このモトウブそのものを取り仕切る、我らがドン・タイラーよ。』

ダグオラ・シティー

西ググ砂漠での戦闘から約3時間後、惑星モトウブの首都であるこの街にソアラの小型艇で運ばれた俺達は、ソアラが言う「次の仕事の依頼人」との待ち合わせ場所らしき酒場に案内された。

依頼人の指定らしいが、人目を避けたいのか、中心部から随分離れた寂れた酒場だ。

無愛想なマスターにニューデイズ産の酒を頼み、テーブル席に腰を降ろす。

依頼人を迎えに行くと言って出て行ったソアラを待つ間、手持ちぶさたになった俺は先の戦闘で台無しになった私服を新調するべく、服飾関連のショップのカatalogに目を通した。

ほお、ウルスラ・ローランが来月に新作発表か。男モノがあれば目を通しておきたいところだ。

カatalogを読みふけていると、向かいの席に座ったヘンリーが話しかけてきた。

『どう思います？ マース。』

『あー？ ウルスラの新作か？ まあ彼女のセンスは最近のデザイナーの中じゃピカイチだからな。ニューデイズ風な男性服とか作ってくれたら言うことなしなんだが。』

『とことんバカですかアナタは！ ファッションのことではなく、今回の依頼についてですよ！』

憤慨したように言い捨てた相棒が俺の手からカタログを没収する。

ああ、まだ読み終わってないのに。心に余裕がない男はモテないぞ相棒。

『なんだよ、何か気になることでもあんのか？』

カタログを奪われた俺は仕方なく飲みかけの酒が入ったグラスに手を伸ばす。

仕事の話の前にアルコールを取るのはやめるべきだとヘンリーは言っていたが、こちらとらさっき一仕事終えたばかりなのだ。

依頼人の都合で呼び出された以上、ちよつとはワガママ言おうとバチはあたるまい。

『アナタの大物ぶりには慣れてますが、少しは緊張感もって下さいよ。今回、顧客はあのドン・タイラーですよ？』

ドン・タイラー。

あのSEED事変の影響でモトウブを仕切っていた「モトウブ通商連合」や、裏から実質的な支配をおこなっていた四大ファミリーが消滅した後、混乱するローグス全体をまとめあげ、今ではモトウブのトップとしてその名が響き渡るローグスの英雄。

確かに、本来なら一介のフリーの傭兵にすぎない俺達が縁を結べるような相手ではない。

『ソアラが熱心な売り込みやってくれたんじゃねーの？俺達も少しは名が売れてきたってこった。喜ばしいことじゃねーか。』

自慢ではないが、俺もヘンリーも傭兵としてのキャリアは長い。Sランクの原生生物の討伐依頼だろうと、事前の情報さえしっかりしていれば確実にこなす自信はある。特に腕利きの情報屋であるソアラと組むことが多くなつてからは、グラールの規模を誇る民間軍事グループ、ガーディアンズでさえ手を焼いていたレベルの依頼をいくつかこなしていた。

こと戦闘に関してなら、大物から指名を受ける程の評判が廻つていても不思議なことはない。

『別に客が大物だろうが、いつも通り与えられた依頼をこなせばいいだけだろ。リラックスしてこーぜ相棒。』

『大物うんぬんではなく、相手がローグスだということを気にして下さい。以前の依頼で彼らとトラブルになったことをもう忘れたんですか？』

嫌なことを思い出したといった具合に顔をしかめるヘンリー。

そう、確かに以前、俺達はこのモトウブで一度ローグスの小さなファミリーと一悶着を起こし、命を危険にさらしたことがあった。

彼らには他の星における法律・常識といったものは一切通用しない。

過酷なモトウブの環境がそうさせたのか、彼らには彼らが決めた独自のルールがあり、その掟を破った相手には容赦なく、暴力も含めた制裁を与えようとする。

特にファミリーと呼ばれる集団の結束は固く、仲間がよそ者に傷を

つけられようものなら、自分達のメンツにかけて報復をおこなう。

以前俺達が受けたのは、誘拐されたヒューマンの娘を助け出すという、パルムの富豪からの依頼だったが、実際にフタをあけてみればローグスの小さなファミリーが元締めになっていた賭博場で借金を作った依頼人が、返済を渋ったあげく、報復として娘をかどわかされたといった内容だった。

悪質なイカサマにはまったのだと、後に泣きながら言い訳してきた元依頼人の顔も、自分達のシマを荒らしたと何度も襲ってきたローグスの連中のことも、どちらもあまり思い出したい過去ではない。

結局は土地のルールに従い、依頼人に多額の賠償金をローグス側に支払わせることで一応の決着をつけたが、「あの金持ちもお前等も騙される方が馬鹿なんだよ」と得意顔で言い放ってきたローグス側のボスのツラは、今でも思い出すたびにタコ殴りにしたい衝動に駆られる。

『まあ、あん時は相手のローグスも悪辣な連中だったからな。噂通りなら、ドン・タイラーってのは筋は通しても義理を欠くような真似はしないって話じゃなか。まあ依頼の話聞くだけなら特に問題ないだろ。』

そう、まだローグスの一ファミリーでしかなかったタイラーファミリーの時代から、ドン・タイラーは「侵さず、殺さず、貧しきものから奪わず」といった信条を掲げた義賊として有名だった。

個人的にそういう類の信条を貫く連中は嫌いじゃない。

ローグスだからというだけで、俺達とトラブった悪質な連中と同じ

ように見るのは偏見というものだろう。

『だいいいんですがね……………！！…マース、気をつけて！』

言葉を交わしていた相棒の表情に緊張感が宿る。

気がつけば元から客の少なかった酒場は、マスターも含め俺達以外姿を消している。

相棒から注意を呼びかけられたのと同時に、俺も自分に向けられる物騒な気配を感じ取り、即座に目の前の丸いテーブルを横なぎに蹴り倒し、倒れ込むようにその死角を利用して床に伏せた。

ガガガガガガ！！！！

殺気を感じた方向は俺の右手側にあつた広い窓から。

予想を裏切らず、窓からフォトン弾の嵐が俺の座っていた椅子の位置を襲ってきた。

『相手は何人だヘンリー！』

窓から銃撃を受けない店の奥へ転がりながら、突然の襲撃に応戦するべく、ナノトランサーからツインハンドガン・オブシディアンを取り出す。

呼び出した銃の重みを手に感じた後、自分と同様に銃撃から身をかわし、既に臨戦態勢としてライフル・フローズンシューターを手に持った相棒へ敵の数を問いかける。

『サーチ完了！店の外、銃撃方向・ここから距離40程の位置に固

まった敵対反応が3。体温も感知しましたからマシナリーではなく生命体ですね。』

戦況を確認し、こちらに告げる相棒。

『マジかよ、嵌められたかあ？』

脳裏に先ほどまで一緒だった、馴染みの若い情報屋の姿が浮かぶ。

アイツが俺達を嵌めて、何か得するようなことがあるのだろうか？

緑色の大きな瞳の憎めない笑顔を思い返すが、そうした卑劣な真似をする奴ではなかったと思う。

『以前のトラブルの落とし前でしょうか？ドン・タイラーがローグスを束ねているなら、あの一味も吸収されたはずだし。解決したと思っていたのはこちらだけだったのかも知れません。』

ヘンリーがやれやれといった具合で顔を左右に振る。

『ちっ、面倒くせーなあ。……ん？』

俺達が死角に逃げ込んだことに気づいたのか、銃撃が止む。

俺の視線の先には、銃弾の雨を受けた、倒れたままの丸いテーブルがある。

『……ちっ、舐めた真似してくれるわ。……ヘンリー、わかってるな？』

俺と同じく、テーブルを見たヘンリーがライフルに手をやる。

こっちの意図を即座に理解してくれるのは、長年の付き合いの賜物だろう。

『了解。やりすぎないようにしますよ。どうします？この距離で撃ち合っても、制圧は可能だと思いますが。』

『まだるっこしい。俺が行くから援護を頼む。どうせ服は新調するつもりだったんだ。せいぜい派手にやってやるさ。』

言い捨てると同時に俺はツインハンドガンから愛刀・剣影に装備を喚装しなおし、窓側の店の壁にフォトンを流した刀身を叩きつける。そのまま蹴りをくれると、石で出来た店の壁に見事にヒト一人が通れる穴が出来上がった。

『壁の弁償はしねーからな、こんちくしょう！』

気合いを入れる為の叫びをあげ、自分で作った穴から店の外へ飛び出す。

視線は銃撃を受けた方向。

夜明け前のダグオラ・シティーの街並みに、ヘンリーが感知した通り三人のビーストの姿を確認する。

予想外の方角に出現した俺に驚いたのか、三人のビーストは慌ててこちらに銃口を向け直そうとしている。

お構いなしに距離を詰めるべく駆け出す俺。

『っらああああー！！！』

まっすぐに突っ込んでくる俺に驚愕の表情を浮かべながらも、トリガーを引き絞ろうとするビースト達。

刹那、そのうちの一人が突然銃をもったまま、酒場の方向から飛んできたフォトン弾を身に受け、後方に吹き飛んだ。

（ナイス援護！）

心の中で相棒を褒め称え、仲間の一人がやられたことにうろたえを見せるビーストの一人を標的に定める。

残るビースト二人は酒場からの銃撃より、急速に接近してくるこちらを危険と見たか、やっと手に持つライフルで射撃してきた。

『シヨボいんだよバカやろう！』

いちいちこちらの行動に驚愕し、アクションが遅れる三下の銃弾などかわすだけの脅威を感じない。

バシユッ！！

俺は身にまとうシールドラインに一時的に強いフォトンを流し込み、襲いかかる複数の銃弾が体に届く前に全て消滅させた。

慌てて次弾を撃ち直そうとする連中。

『5点。話にならねーよアンタら。』

言い捨てると同時に、距離を詰め終えた俺は走った勢いそのままに

標的にしたビーストの一人に飛びかかる。

『シッ！！』

左手に逆手に持った剣影の鞘を横なぎに払い、標的の胴をしたたかに打ち据える。

鞘に打たれたビーストは苦悶の表情を浮かべながら、真横に吹き飛んだ。

『くっ！！』

残る一人は、距離がつまったことで、ライフルから片手用のセイバーに武器を喚装し直すが、敵を目の前にしてのその行動は俺にとって絶好の隙にしかない。

『出直してきな！』

先程と同様、左手の鞘を使い、今度は先端を利用した突きを相手の腹にお見舞いする。

『げふっ！！！』

突きを食らった最後の一人は、派手に後方に倒れ込んで動かなくなった。

『はい、終了。』

付近から敵意がなくなったことを確認し、剣影をナノトランサーに収納する。

酒場から飛び出して制圧まで約一分。

まあまあといったところか。

『しっかし手応えのない連中だったなあ。ヒトを襲うには経験が足りなすぎる感じだったが。』

襲ってきた連中の顔をじっくり拝んでやろうと、泡吹いて倒れている一人に近づくべく歩き出す。

すると俺の耳に、突然聞き慣れない女の声が入ってきた。

『お見事！』

人通りのないダグオラ・シティーの街並みに、パンパンという拍手の音がこだまする。

『あん？』

音のした方向へ目を向けると、街並みの民家の死角から、一人のヒューマンの女が現れた。

体のラインがあらわになった挑発的な服装で、微笑みながら拍手を続けている。

見た感じ、年の頃は二十代半ば。長いストレートの髪が街にふく風に揺られている。

蠱惑的な印象を受ける美人だが、過去の記憶に出会った覚えはなか

った。

『だから言っただじゃなか！こんな真似するなんて仲介役のアタシに
対する侮辱だよ！』

突然の美人の出現に面食らっていると、今度は聞き覚えのある声の
我らが腕利き情報屋ソアラが、美人の後に続いて姿を現した。

こちらはかなりご立腹の様子で、拍手を続ける女に食ってかかるよ
うに叫んだ後、バツが悪そうにこちらを見て、ゴメンと両手を併せ
て謝ってきた。

『やれやれ、やっぱりこんなことだろうと思いましたよ。』

後方からの足音に振り返ると、ライフをナノトランサーにしまい、
戦闘態勢を解除したヘンリーが近づいてくる。

ヘンリーはこちらを見て、外傷がないことを確認すると満足げに微
笑む。

こいつからしてみれば、いまだに俺の戦い方は危なっかしく目に映
るのだろう。

心配性な相棒に五体満足な自分の様子を見せた後、女を問い詰める
べく視線を移す。

『腕試しはすんだかい、依頼人さん？……』
「ってか、ドン・タイラー
が女だなんて話は聞いたことなかったけどな。」

そう、この襲撃は言ってみれば茶番だったのだろう。

深夜、中心部から離れた一帯とは言え、モトウブの首都であるダグ
オラ・シティーでこんな戦闘があつて、人っ子一人姿を見せないの
も、事前に裏で手が回っていたからだとすれば納得がいく。

『驚いた、気づいてたの？』

俺の言葉を受けて、女は目を見開いて言った。

やれやれ、これだけ舐められるとさすがにこっちの気分も悪くなる。

『ソアラの様子だと、事前に俺達の実力は聞いてるはずだがな。酒
場の銃撃、どれだけ固いテーブルか知らねーが、普通あれだけ弾丸
食らったら原型留めずに粉々になるもんだ。はなっから連中に武器
のフォトン出力をスタンモードにして襲わせたんだろ？』

最初の銃撃の時点できな臭い点は多かった。

俺達を殺すのが目的なら、それこそ店ごと爆破するなり、もっと他
にやりようはあつた筈だ。

まあそんな真似されてれば、こっちもヘンリーが先にサーチして気
づいていたろうが。

相手側に明確な殺意がなければ、こちらも無用な殺生は好まない。

俺もヘンリーも、使用した武器はスタンモードに切り替えていたか
ら、伸びている三人のビーストも命には別状ないはずだった。

女は俺の説明を聞くと、満足そうに微笑んだ後ソアラに話しかけた。

『アナタを疑った訳ではないけど、聞いた話以上に信頼できそうな方達ね。ありがとう、謝礼はお詫びも兼ねて十分させて頂くわ。』

ソアラは依然として慚然とした顔をしているが、謝礼というセリフが聞こえた際に一瞬眉が下がったのを俺は見逃さない。

このアマ、後で迷惑料としていくらかふんだくるぞ、こんちくしう。

女はソアラに語りかけた後、俺とヘンリーに体を向き直し、深々と頭を下げてきた。

『この通り、失礼をお詫びします傭兵殿。何分、絶対に失敗が許されない依頼なものですから、私の性分で、自分の目で見なければ安心してお願い出来なかったのです。』

突然態度を変えられた上、丁寧な謝罪を受け、今度はこちらが狼狽する。

ヘンリーを見ると、こいつもこっちを見ながら苦笑して降参だとかりに肩をすくめている。

やれやれ、相変わらず女に甘い奴。まあ俺も人のことは言えないんだが。

『ソアラ、いい加減教えてくれよ。ドン・タイラーからの依頼ってのはデマだったのか？』

ことの顛末は飲み込めたが、一点だけ理解できない点が残る。

ソアラの話だと、今回の依頼はドン・タイラー自身からのはずだ。

目の前の女がドン・タイラーだと言うのはさすがに無理がある。

何しろ性別も、種族さえ違う。

ビーストが支配するこのモトウブで、ヒューマンの女がトップに立つことなんて有り得ない話だ。

『いえ、おっしゃる通り私は代理の者ですが、依頼は間違いなくドンからのものです。その辺りの詳しいお話もさせて頂きたいので、今度こそちゃんとした場所に移りましょう。個人的なお詫びとして、謝礼は別にして奢らせて頂きますわ。』

ソアラが口を開く前に、女が俺に答えた。

やれやれ、また随分きな臭い話になってきたな。

『……わあつたよ。その代わり、一つ条件がある。』

俺からの問いに、女が不思議そうにこちらを見やる。

『……酒場の壁の修理代を請求するのは勘弁してくれな？別口でバイクの弁償請求されてて、財布に余裕がねーんだわ。』

言い終えた俺を見て、女は口に手をあてて笑い出し、ソアラとヘンリーがやれやれといった感じでうなだれた。

どんな依頼だか分からないが、こちららフリーの傭兵稼業。

体張るのには慣れている。

きな臭い話だろうが、モトウブのボスからのれっきとした依頼だつてんなら、好奇心もつづく。

俺は呆れている相棒達の肩を叩き、場所を変えるべく歩き始めた女

の後に続いて、もうじき夜明けを迎えるダグオラ・シティーを歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1458y/>

～ 傭兵達の挽歌 ～ PSPo2i外伝

2011年11月4日07時07分発行